

## H-02 家計勘定の表の見方

2010・July

### (中心になるのは受取と支出のバランス表)

1. 家計に関するデータとしてはGDP(正確にはGDE)速報が 4 半期ごとに推計・公表され、GDPの動きやその主要項目たる民間最終消費支出の動きが注目を集める。しかし国民経済計算体系(SNA)ではこのGDEとその主要項目の動きというデータはオマケのような存在である。System of National Accountという重々しい名前にふさわしく「勘定」体系がSNAの中心部を占めている。SNAでは一国経済を①家計(個人企業を含む)、②企業、③金融機関、④政府、⑤(国全体の)海外との取引という各部門に分けた上で各部門について、企業でいうところの損益計算書とバランスシートが作られており、これがSNAというデータ群の中心部分を占めている。「損益計算書」であるので各部門の受取の合計とその中身、支払の合計とその中身がわかる。収支の差額は貯蓄という名称も含め各種の名前のついたバランス項目になっている。SNAは支出の計数をあつかうだけではないのである。また「バランスシート」も作られているので資産、負債の総額と中身および資産・負債の差がわかる<sup>1</sup>。

### (所得支出勘定と資本調達勘定)

2. 家計部門も含めて損益計算書にあたる部分は所得支出勘定と資本調達勘定に分かれている。

所得支出勘定とは家計の所得、金利収入、年金等からなる受取から消費支出や金利の支払、社会保険(年金や医療保険)の掛け金などの支出を除いて残差(貯蓄)を算出するまでのプロセスである。

また資本調達勘定とはこの貯蓄などの受取から住宅投資などの資本支出を除いて残差(純貸出/純借入)を算出するまでのプロセスである。この純貸出/純借入はかつては「貯蓄・投資バランス」と呼ばれていたが、所得支出勘定と資本調達勘定を合算してみればつまるところ家計の受取と支払の収支差であることがわかる。このような理由で SNA では「貯蓄・投資バランス」という用語は使われていない。しかしこの言葉はなじんでいるので本データ集でも使用している箇所がある。

ところで勘定はここで終わりではない。以上で得られた収支差(家計は通常黒字である)を如何に資金的に運用したのか、この内容が勘定の最後の部分に出てくる。この部分は資本調達勘定の「金融取引」といわれるものである(これに対して上の資本調達勘定は同勘定の「実物取引」と呼ばれている)<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 資産、負債勘定も本データ集に今後入れる予定である。

<sup>2</sup> 当然金融取引には借入れも貸出しも含まれる。貯蓄と借入れが並存することは通常見られる家

3. 概念上は金融取引の収支差である「純貸出(+)/純借入(-)(資金過不足)」と実物取引の収支差である「純貸出(+)/純借入(-)」は計数が一致すべきものである。しかし推計に使っているデータが異なっているため一致しない。使用目的に応じてどちらの収支差のデータも利用される。

#### (所得支出勘定の中の小勘定)

4. SNAのデータを読みこなし難くしているのは所得支出勘定がさらに5つの小勘定に分かれていることである。すなわち

- (1) 第1次所得の配分勘定
- (2) 所得の第2次分配勘定
- (3) 現物所得の再分配勘定
- (4) 所得の使用勘定 a. 可処分所得の使用勘定
- (5) 所得の使用勘定 b. 調整可処分所得の使用勘定

からなっている。各勘定の概要は

- 第1次所得の配分勘定: 受取に所得、雇主の社会保険負担金、利子受取等が計上され支払には利子支払等が計上される。
- 所得の第2次分配勘定: 年金などの受取が受け取りに計上され、支払いには所得税、雇用者本人の年金、医療保険の掛け金等が計上される。なお各勘定は上記の説明のように「損益計算書」の形となっているので受取と実際の支出との差額が算出される(可処分所得と呼ばれる)。なお勘定(1)で算出された受け取りと支出の差額<sup>3</sup>が勘定(2)の受取の一部を構成している。このような差額(バランス項目)を通じて各勘定はつながっている。
- 現物所得の再分配勘定: 家計には実質的な所得として医療保険による医療費の負担分がある。なぜ家計の所得なのかといえば、実際には家計は自己負担分しか医療費を支払わない(残りは医療保険が医療機関の請求により支払う)が、これは医療保険がまず家計に保健負担分を支払い、家計が医療費の全額を支払うという行為と同じだからである。この勘定はこのように保険による医療費の支払い分をいったん家計の所得とみなして計算された勘定である。具体的には保険による医療費の負担分を勘定(2)の可処分所得に加え調整可処分所得を算出するのがこの勘定である<sup>4</sup>。

---

計の構造である。この意味で本文の説明は不正確な点を含んでいるが勘定の特徴を示すためにかかる説明を行った。

<sup>3</sup> 勘定表では受取の金額と支払の金額が等しい。これは受取や支払いに差額が含まれて計算されているため、支払いの中身は「実際の支払い」と差額からなっている。本文の説明では勘定の構造が理解しやすくするために支出を「実際の支払い」の意味で使っている。

<sup>4</sup> 通常の医療費の保険による支払いのほか高額医療費の払い戻しなども含まれる。詳しくは用

- 所得の使用勘定 a.可処分所得の使用勘定:可処分所得から最終消費支出にどれだけを充て残差である貯蓄がどれだけ発生したかを示している
- 所得の使用勘定 b.調整可処分所得の使用勘定:aの勘定と同じことを調整可処分所得について行っている。所得には医療費の保険による支払いを加えると同時に消費にもこの医療費部分を加えている。この結果勘定 a,b 両勘定とも貯蓄は同じ額となる。